

『夜の寢覚』考

―寢覚の君の精神的成長にみる

物語の構成と主題―

二十九回生 谷岸千恵子

平安後期物語に位置する『夜の寢覚』は、

第一部―巻一・二

第二部 中間欠巻部分

第三部 巻三・四・五

第四部 末尾欠巻部分

という、広大な構造であったであろうことが解明されている。(注1) そのような膨大な物語の中で語られるものは、「寢覚の御仲らひ」(鈴木一雄氏校註・訳『夜の寢覚』39頁、小学館。以下原文の引用は同書による。)の表現から、あやにくな縁に結ばれた男女の仲らひであることが想像できるのであるが、実際には横井孝氏が述べておられるように「『女』の側からの思慮や行動が物語を展開させてゆく中で進行とともに『男』の主人公の性格が薄くなっていく」のである。また、「無名草子」においても、

寢覚こそ取り立てていみじき節もなく、又さしてめでたし
といふべき所なけれども、初めよりたゞ人ひとりのこと

て、ちる心もなく、しめじめとあはれに心入りて作り出で
けむ程思ひやられて、あはれにありがたきものにて侍れ。
(岩波文庫65頁)

と、「ただひとり」寢覚の君がこの物語の「主人公」として選び出されている。

その点横井氏が指摘された「当時の物語文学が超人的な美質を備えた男主人公を設定^(注2)」していたのに比較するとこのことがかなりの特異性として考えられてくる。そこで、ここでは主として現存する第一部及び第三部に注目し、主人公「寢覚の君」の身辺に起こり来るさまざまな事件を追いなながらその各段階での彼女の精神的成長を探り、そこからこの物語の構成と主題を明らかにしていきたいと思うのである。果たして著者は、この『夜の寢覚』に何を描こうとしたのであろうか。

第一章 第一部（卷一・二）の構成

第一節 天人降下事件

寢覚の君は源氏の太政大臣・師の宮の女を父母とする高い家柄の中の君として登場する。その深窓の姫君に訪れた天人降下事件は、三笠浩輔氏が述べておられるように、

①物語に展開を与える一大契機

②姉大君と反目するようになる伏線を張る。（注3）

大君にとって「昔よりとりわき殿の教へたまへど、つねにたどたどしくてえ弾きとどめぬ」（43頁）琵琶を、天人が寢覚の君に伝授してしまったため。

という意義を果たしているように思われる。事件前後の寢覚の君にはさ程変化もなく、依然としてつつましかかな十四歳の姫君であるが、天人の

「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」（44頁）

という予言がこれからの寢覚の君の人生を的確に予言し、物語に方向を与えるものである点からも、実に奥の深い冒頭部分であると思われるのである。

第二節 男君との契り

互いに相手を倒錯した状況の中の男君（男主人公）との契りは寢覚の君にどのような変化を与えたのか。この事件を巡っての寢覚の君の描写を追ってみると、

○かの姫君、恐ろしくいみじとおぼしけるに、やがてまどひたちける御心地、日を経て、いみじく苦しげにのみなりまさらせたまへば（72頁）

○あさましかりしことをおぼすに、胸あく世なく、それら恐ろしくのみおほしくだけたるさま、いとあはれなり。

（77頁）

等の表現に見られるように「恐ろしくいみじ」と感じていることが客観的に地の文の様態描写として、また男君の目に写った様子として記され、寢覚の君が男君の誰たるかを知った際も、地の文の

○いみじとおぼして、面の、さと赤みたまふままに、涙こぼれかかりぬる、（82頁）

○顔に袖を押しあて背きたまひぬる（83頁）

という描写で「いみじ」と思い続けては涙に暮れている様子が窺われる。ところが、男君が新少将の歌で事の真相を知らされながら、猶も寢覚の君の夜具に忍び込んできた後は、単に「いみじ」というだけではない、一歩明確にされた物思いが描写されている。

○「見とがめたまふ人もや」と、我が心の鬼に恐ろしくわりなければ（106頁）

○いとど恐ろしくわびしかりつる名残に、かたはらいたささへ添へて、いみじく苦しげなる御気色を（128頁）129頁）

○「世に知らずまばゆく心憂き身の有様。つひには、いかに憂きものにおぼし果てむ」とおぼせば、いみじくつみたまへど、とどめがたく涙のみ流れ出でたまふを（129頁）

。我も、げに、この君の見えたまはぬはおぼつかなく思ひならひにしを、身の心憂く恥かしくなりにし後より、心の鬼に、そら恐ろしく恥かしくのみおほえて（138頁）

。ただ、我が御心地のかくのみあるを、「え世にあるまじとおぼすなめり」と、心得たまふに、ましてと、胸ふたがりて、我も涙をとどめやらで（139頁）

つまり寢覚の君の心中に、初めて自分以外の人間の心中を推し量るといふ側面が表れてきたのである。これは自責の念の芽生えと歩みを同じくしており、当然のことながら姉大君に対して、また次兄宰相中將や周囲の人々に対して向けられるものであった。「男君と契りを結ぶ」という事件は、初めて深窓の姫君の身に変化を与え、物思いの種を宿らしめるという意義を果たしているように思われるのである。

第三節 石山の姫君出産

男君との契りて懐妊した寢覚の君は石山で姫君を出産、「母」という新しい立場をその身に受けることになった。娘に寄せる寢覚の君の思いが断片的に語られることになるが、しかしそれは次の一節で窺い知れるように

姫君は、すべて撫子の露のあはれは忘れて、「いみじかりしほどになくなりなましかば、かか事聞かましや」と、生き返りにける命を、恨めしくおぼし乱る。（197頁）

彼女の物思いの一部分にしかすぎないものであり、家族への思い——以前の、真相を知られることに対する家族への不安を思いから、真相が周囲に知られてしまうという過程

を経て、事実を冷静に受けとめた上での昔日の回顧へと変化してきている。——に先行されてしまうのである。

この頃の寢覚の君の変化でもう一つ特筆すべき点は、棚橋真佐子氏が述べておられる男君とのあやにくな縁に対する意識の芽生えが見い出される点である。（注4）

かくは言ひ騒がるれど、人に似ず憂かりける前の世の契り知らるる節よりほかに、過つことありとも、我が心にはおぼえたまはねば、言はむかたぞなきや。（207頁―208頁）
という、男君との契りを「宿世」としてとらえている一節や、少將が、

（女君の）あさましくいみじとおほしたりつるさまも、ことわりにて、「あながちに忍び靡かしたてまつりても、なにはばかりかは、あいなし」と我が思ひ固められたることなれば、（237頁―238頁）

と、手引きを拒む部分にも、寢覚の君が少將にそうさせる程、一途に男君を「あそろしくいみじ」と認識している様子が感じられて、深窓の姫君の頃と比較してみると、「自分の意志」というものを持ち始めたように思われてくるのである。

このように考えると、石山の姫君出産という物語構成上の一事件は、寢覚の君が「母」になるという事実よりも意志をもった一人の女性になる、そのきっかけを与えたという点で意義があるように思われる。確実に、その精神的成長の軌跡が残されているのである。

第四節 第一部総轄

以上、第一部の構成を追いながら寢覚の君に注視してくと、終始一貫して寢覚の君を恋い慕う男君に対し、寢覚の君が男君を恋い慕う気持ちは全く見られないことに気づかされる。無論前節で述べたように、次第に男君への感情が意識的になっていく点は指摘できるが、それは決して恋い慕うという類のものではなく、男君との世間の取沙汰に我が身を嘆き、男君を「困った存在」としてとらえているのである。即ち、このような瀉橋啓氏の言葉を借りれば「男君拒否」(注4・5)の姿勢、また寢覚の君内部で我が子への思いが家族に対する思いに先行されているという事実は、第一部に於いて寢覚の君が「女」や「母」としてではなく「太政大臣の中の君」という立場に終始している、という点を指摘するものと思われるのであり、第一部最後の

年の数添ひたまふけぢめにや、身の憂さもあはれも、ありしよりけに、思ひ知られたまうをり多かり(245頁)

という寢覚の君の描写は、女や母に成りきれないながらも幾つかの事件を経て今確実に、一步精神面で成長・変化してきた形で結ばれているのである。「自らの悲劇に対して自覚的になりつつある」(注4)と棚橋氏が注された寢覚の君の姿を明示したこの一文に励まされて、更に第二部・第三部へと寢覚の君の成長を追っていきたいと思う。

第二章 第三部(巻三・四・五)の構成

第一部 第二部(中間欠巻部分) 概説

第二部では、父や兄の決定に逆らうこともできずに結婚した寢覚の君が、次第に妻や母としてその家庭的な才腕を見せ始める点に注目したい。欠巻部分であるために、その精神的成長を順を追って眺めることのできないのが残念であるが、そこでは明らかに「自分の意志」が芽生え、一人の人間として人格を持ち始めていることが窺われるのである。男君に対しても、本意でない左大将との結婚がその思慕の情を強めていったらしいが、第二部後半になると、母としての立場が次第に男君を忘れさせていったものらしい。男君は、相変わらず寢覚の君を慕っているのであり、一方で、帝の執拗なまでの寢覚の君への思いは左大将の死によっていよいよ増すばかり——それらの思いが交錯して、物語は第三部へ受け継がれていくのである。

第二節 帝闖入事件

第三部当初に於ける寢覚の君は、男君を父とする二人の姉弟・及び左大将の遺子三人の娘の母として見事な采配を振っており、そのような自分を「いつのまに、我が心も、かう大人びしぞ」(267頁)と自覚している。この点、第一部で検討してきた深窓の姫君と比較すると、実に著しい変化ではないだろうか。まさにこれらは寢覚の君の心中に

「母」としての自覚が既に深く根ざしていることを想像させるし、著者はそういう自分を客観的に眺める術をも寤覚の君に与えているのであって、実に興味深い件である。

その寤覚の君が大皇の宮（男君の正妻女一の宮の母）の策謀に掛けられた。「帝闖入事件」は、大皇の宮の思惑に反して、寤覚の君に男君への愛を自覚させる結果を招いた。

この事件以前には「なまうるさく心化粧せられたまふ」（260頁）という複雑な心境ながらも、男君に靡くまいと固く意を決していた寤覚の君である。それが咄嗟のことに一途に男君を思ってしまったのであり、後に、

かかる事の節には、よろづを消ちて、ただかの人の事こそ、恐ろしうも、つつましうも、なのめならずおぼえつるは、おぼろげならずしみにける心こそ。（313頁／314頁）

と、我が心の奥底を思い知らされている。この屈折した寤覚の君の心理は、子供の母として、その父たる男君を頼りたいとする思いと、女として、正妻ある男君には決して靡くまいとする、二つの相反した思いによって形成されているのではないかと思われるのである。

更にもう一点ここで指摘したいのは、鈴木紀子氏によって指摘されているように寤覚の君を「心強し」として表現してある箇所が随所に見られる点である。

○「かばかりの絆どもを行きちがはせて、いとかう、そば顔なる御心強きは。（254頁）

○「さて、あさましう、心強がりつる人の心かな。さばかり思ふにては、後の逢瀬、よにあらせじものを（312頁）

帝の権威を失墜させる程の「心強い」姿は、第一部では到

底想像もできなかったものであり、その寤覚の君の変化に驚かされるのである。

以上、「母」として「女」として「心強い」までに変化してきた寤覚の君を探ってみると、「人形のような姫君が自我に目覚めた時、彼女は与えられた運命に逆らってそれを打ち崩して行くような積極性は未だ獲得できないが、それを甘受しないという方法で拒否する勇気を発揮した。」（注6）と鈴木氏が指摘された注目に値するように思う。寤覚の君はこの帝闖入事件を通して、第二部で芽生えた「自分の意志」を更に強固なものへと確立させていくのである。

第三節 生霊事件

自我に目覚めた寤覚の君は、この後その「人生観」とい

うものをまで私達に提示する。

①「何事も、なごてか人に劣らむ。いかで、いみじう里りに、恥かしく、人にすぐれても、ただなる世に過いてばや」（中略）②「昔よりけしからず、あはつけく、軽々しう、憂きものに、人に言いそしらるるを事に、」（後略）

（346頁／347頁）

つまり、彼女自身①という自負を持ち②のような人生を望んでいたにも拘らず、実際には③という我が身の有様なのであり、その人生を屈折せしめた根源の男君を（帝闖入に際して一度は頼みとしながらも）再び避け始めるのである。女の「一宮の」生霊事件」は、そのような思いに沈んでいた寤覚の君を、決定的に男君から引き離すことになった。

内の上の御事の、せむかたなく、わびしう思ひまどはれし
ままた、かの人の御陰につきて、誘はれ出でなむとせしほ
どに、心弱く乱れたちて、今までながらへて、かかる事を
聞くが、我ながら、思ひとるかた強からず、口惜しう、も
のはかなき心の怠りなり」 412頁〜413頁

即ち、帝闖入の際の我が心の弛みを深く後悔しているの
である。これは帝闖入事件以前に

のがれどころなからむことは、なほ後の悔いの恐ろしさに、

(271頁)

と述べられていた部分と呼応するものであり、寢覚の君は
後悔の念に苛まれながら、次第に出家への願いを募らせて
いく。数々の憂慮に追い詰められた寢覚の君をとらとり出
家に誘うものとして、生霊事件はその意義を果たしている
のである。

第四節 出家決意

しかし、その出家への思いの中でただ一つ、子を思う
「母」の気持ちだけが、寢覚の君の決意を妨げている。彼
女は今や「あまたの御人あつかひせし親さまになりたまへ
る」(464頁)のであり、自らもそれを自覚しているだけに
後の事が不安なのである。ところが「あはれにうらやまし
くも行ひすませたまふ」(455頁) 齋宮を西山で目のあたり
にすると、どうしても出家の願いを抑え難くなってくる。

姫君の御恋しさぞわりなく苦しきまでおほゆれど、浅から
ず見馴れたまひにしかば、さりともおほし出でぬやうはあ
らじ。あらぬ様に絶え籠りぬと聞きたまひても、ゆかしくあ

はれとおほさぬやうもあらじ。渡りたまひても見たまひて
む。小姫君ぞ、なかなか、父殿は見もことにつきたまはで、
心苦しけれど、およずけたまふまでは身に添へても見てむ。
宰相、大納言の上たちは、いとうしろやすし、内侍の督の
君ぞ、さすがにおほやけしき御まじらひにて、おろかにあ
べき人の限りにては、いとほしげにおはすべけれど、うち
うちの御後見は、よそながらも思ひやりきこえつつこそは、
後見きこえぬ。(457頁)

と我が身に言い聞かせながら、寢覚の君は出家の決意を固
めていくのである。

即ち、寢覚の君にとつての「出家決意」は、湯橋氏の指
摘にあるように「ここに至って初めて自らの運命を方向づ
けた」という意義をも含むものと思われるのである。自分
の意に反して周囲に奔弄されてばかりいた寢覚の君が、後
ろ髪を引かれるような母としての愛情に妨げられながらも
固く意を決しようとしたのであり、その決意の固さは「あ
ながちにのがれ背きたてまつりたまふ御心強さよ」(470頁)
と表現されたのである。結果としては男君との「あさから
ぬ契り」(寢覚の君が第三子を懐妊した)により本意を遂
げるに至らなかつたが、寢覚の君のそれまでの人生を思え
ば、これが一つの大きな区切りになつたのではないかと思
われるのである。

第五節 第三部総轄

この第三部が物語に果たした意義は、作者がここで初め
て寢覚の君の心中に深く踏み込んだことによつて、物語に

深まりを与えた点にあるように思われる。寢覚の君・男君・帝・大皇の宮という限られた登場人物でありながら一段と興味深い展開になったのも、作者のそのような深い心理描写が成した技と思われるのである。寢覚の君も自我確立を果たし、その人生を自ら切り開き始めている。これからはその熟した「自己」を以てどう人生に対処していくか、それが末尾欠巻部分の担う所のように思われるのである。現存部分最後の寢覚の君は二十八歳、六人の子供の母として、大きな責任と義務を負う一人の女性となったのであった。

結論

『無名草子』の評を根本に於いて「女の物語」の構造をこれまで探ってきたわけであるが、ここで改めて『夜の寢覚』に於ける「寢覚」の意味について検討してみよう。

第一部に於ける「寢覚」はほとんど男君側の寢覚めであった。男君が寢覚の君恋しさのあまりに眠れぬ夜を夜を夜を過ごすのである。しかしそれは男君に限ったことではなく、寢覚の君においても男君への恐怖・姉大君に対する良心の呵責とから寢覚めがちな夜々を過ごしている。ただ作者がここで寢覚の君の心中にほとんど立ち入っていないために、それが表面に出ていないだけなのである。一方、第三部に於ける両者の「寢覚」を比較してみると、男君は終始一貫して寢覚の君恋しさ故に悶々と眠れぬ夜をすごすのであるが、寢覚の君の方は大皇の宮への恐怖・生霊事件がその中

心となっている。これは一体何を意味しているのであろうか。

ここで注意しなければならないのは、第一部・第三部を通じて寢覚の君の「寢覚」は男君が寢覚の君を恋慕う故に生じている、という点である。岡田啓助氏の言葉を借りれば「男君が寢覚の君を慕えば慕う程、その反動として大君（第一部）・大皇の宮（第三部）によって傷つけられ、心ならずも死・出家を考えなければならぬようなところまで追い込められ」^{注7}るのが寢覚の君なのである。即ち、この物語を貫いている「寢覚」が男君のそれであっては何等物語性が生じない点からも、『夜の寢覚』の「寢覚」が指しているものは、寢覚の君のそれではないかと思われるのである。

結局、この物語で作者が究極において描こうとしたものは、お互いに恋慕っている男女主人公の思い遂げられない悲恋というよりも、周囲のさまざまな思いの交錯によって生涯物思いの中に過ごさなければならぬ寢覚の君が、その境遇の中で次第に意志を持った一人の女性として成長していく、その姿なのではないだろうか。作者は物語の冒頭に於いて

人の世のさまざまなるを見聞きつもるに、なほ寢覚の御仲らひばかり、浅からぬ契りながら、よに心づくしなる例は、ありがたくもありけるかな。（39頁）

と、主題が男女のままならぬ恋であることを提示しながらも、天人の予言を通して物語が女主人公中心であることを

告げ、更に第三部に於いて寢覚の君が天人の予言に思いを馳せることよって、その予言が終始物語の根底に流れていたことを、即ち寢覚の君の「いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世」(44頁)を物語が追ってきたことを告げ、現存部分最後に於いて寢覚の君の「夜の寢覚絶ゆるよなくとぞ」と締め括っているのである。これはあたかも物語がこの第三部で終結し、第四部があることを忘れさせるような結びであるが、第三部終結説・同否定説の如何に拘らず、この結びが冒頭・予言と呼応している事実は明らかなのであるから、第三部までで主題を考察することも決して作者の意に沿わないこととは思われないのである。

注1. 鈴木一雄氏校註・『夜の寢覚』小学館。

注2. 横井孝氏『寢覚』論―「女の物語」として・序説

注3. 三苫浩輔氏『夜半の寢覚』の倫理

注4. 棚橋真佐子氏「寢覚」の女君について―母としての

立場と人生態度―

注5. 湯橋啓氏「寢覚物語の女主人公の家族」―父君と大

君と―

注6. 鈴木紀子氏「夜の寢覚」と宇治十帖―大君物語との

関係―

注7. 岡田啓助氏「夜の寢覚」の寢覚について